

学位授与番号	医博乙第1085号
学位授与年月日	平成2年4月18日
氏名	小橋 一 功
学位論文題目	尿路移行上皮癌における subrenal capsule assay を用いた抗癌剤感受性試験の検討
論文審査委員	主 査 教 授 久 住 治 男
	副 査 教 授 正 印 達
	教 授 橋 本 和 夫

内容の要旨および審査の結果の要旨

尿路移行上皮癌31症例34腫瘍の臨床材料において、subrenal capsule assay（以下SRC法）を用いた抗癌剤感受性試験を施行し、以下の結果を得た。（1）腫瘍移植後day6において、肉眼的に移植片の存在が認められたのは97.7%と高率であったが、組織学的に腫瘍細胞が認められた移植片は45.4%であった。移植片の増大（ Δ TS）と移植片における間質組織の占有率との間に負の相関（ $P<0.005$ ）が、認められた。（2）day6において、腫瘍細胞からなる偽嚢胞形成を示す移植片が認められ、腎被膜下が、尿路移行上皮癌増殖の良好な環境であることを示唆するものと考えられた。（3）腫瘍細胞密度の高い乳頭状腫瘍や、腫瘍細胞によりほとんど占拠されたリンパ節転移巣では、個々の腫瘍片に含まれる腫瘍細胞と間質組織の比率が比較的均一と考えられ、SRC法による試験結果の信頼性が高いことが予想された。（4）SRC法の抗癌剤感受性評価可能率は97%であり、 Δ TS判定法では、CDDPに対し33%、ADMに対し41%、MTXに対し32%およびCPMに対し29%の腫瘍が感受性ありと判定された。（5） Δ TS判定法とTGIR（tumor growth inhibition rate）判定法の一致率は73%であり、移植片において間質組織の占める比率が高い腫瘍においては、TGIR判定法より Δ TS判定法の方が、より多くの抗癌剤に感受性ありと判定された。（6） Δ TS判定法では、S-期細胞数の比率の高い腫瘍群で、抗癌剤に高い感受性を示したが、TGIR判定法による結果では、S-期細胞数の比率の高低による抗癌剤感受性に差が認められなかった。（7）臨床的に抗癌化学療法の対象となる腫瘍は、間質組織の多い浸潤性の非乳頭状腫瘍であることが多いことから、TGIR判定法に比し、 Δ TS判定法が、臨床的に有意と考えられた。

（8）CPM 180mg/kg前処置による免疫抑制効果は十分でなかったが、無処置群に比し、移植片の増大は良好な傾向にあった。（9）CDDPとADMの併用実験では、抗腫瘍効果の増大と、副作用軽減傾向が認められ、SRC法は抗癌剤併用効果判定のための実験モデルともなり得ると考えられた。（10）SRC法による感受性結果を臨床に応用した1例では、partial responseが得られ、計3回施行した感受性試験の結果と臨床経過との間に一致がみられた。

以上本論文は、尿路移行上皮癌のSRC法応用における問題点を明らかにすると共に、感受性評価法を示した点で、泌尿器癌化学療法の進歩に資するところ大きな論文と評価された。